

教務だより

2012年8月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

苦しいときは、登っているとき

茗溪塾塾長 宇野 雅春

夏期講習も中盤を迎えました。ロンドンオリンピックで盛り上がっている中で、勉強に追われていることに、少なからず不満を感じている生徒も多いように見受けられます。それにしてもこの暑さですから、つい愚痴が出るのもいたしかたない気がします。でもここは正念場です。「得意」を伸ばし、不得意を克服することがそんなに容易なことではない以上、自分なりに努力を積むしかないので。事実、受験生のほとんどは実際の受験を経験していないので、甘い憶測にすぐ走りまします。「勉強していなかったけど、合格した！」みたいなことです。また、ちょっと頑張ったつもりで成績がとれなかったりすると、すぐ「もう駄目！」と思ったりします。部活などに追われる生活で成績がとれていないのに、解決の方向を勉強を強める方向でなく、自分の都合の良い方向に持っていこうとしたりします。何とか「楽に」成績を上げたいのです。それもすぐに…!

学習のレベルが高くなってきて、今までと同じような勉強では成績がとれなくなり、それで塾に入ってくる生徒は多いと思います。勘違いは「塾に入れば、成績が上がる!」という安易な気持ちです。あるいは、「塾に入ったからもう大丈夫」という安心感です。学校の勉強もこなしつつ実力をつけていくという「塾での勉強のあり方」が軌道に乗るまでの「努力」は、実は並大抵の事ではないのです。それこそコツコツやるという地道な努力です。

人生を振り返ってみると、何かが上達したとか、成績が上がったとかいうときは、必ずその前に苦しい時期があります。長く先生をしています、若い時は夏期講習が朝から晩まで、あえぐようにつらい日々でした。その頃に比べると今の方がタフになっています。若いときはとんでもなく大変に思えたことが、経験を積んでくるとそうでもないことに気づかされます。そもそも仕事のようにレベルアップを常に要求してくるものは、むしろ「楽」がなくて当たり前のはずです。ここまで来て思う事は、苦しい思いをした後程、自分の中でレベルが上がったことを実感できたということです。レベルが上がるということは「成長する」という事と同意義と考えても良いと思います。

「苦しい!」と感じているときは、自分が伸びているときだということです。「苦しい」から逃げてしまうのでは、成長とは無縁な人生になってしまいます。人が成長しないということは、自分を見つめなおすことができないということであり、その結果、いつもまわりに不満を感じ、自分の現実に不満を感じ、安定した心の平和が得られないことにつながります。「若いときの苦勞」は「買ってでもしなさい」というのは、豊かな人生を送るための教訓です。

昨年、東日本大震災という大きな災害に見舞われた日本は、随所に傷を負っています。経済も心の傷もまだまだ癒えるには時間がかかります。10年先を目標に掲げて振り出しから「重い努力」を始めている人々もたくさんいます。

大津市でのいじめの問題も気持ちに大きく立ちはだかつてきています。人に理由もなくいじめられたりすることのつらさは想像をこえるものです。勝手な解釈ですが、納得できないことが続くのは人間にとっては非常につらいという事です。まして、「いじめ」となれば、心はずたずたにされます。納得できないマイナスのことに翻弄されつつ何とか頑張っている人もいるというのは夢も希望もないと思います。「むかつく」からいじめをしても良いという論理はありません。究極に自分をあまやかしているにすぎません。

今受験生には「受験」というはっきりとした目標があります。「努力」は出来る状態にあるはずです。努力の前に立ちほだかるのは、やる気をつぶすような「悪意」もしくは「我が儘」や「勘違い」です。これを極力なくすことが私達教師の仕事と改めて痛感しています。前向きな「苦しさ」はむしろ喜びを作ります。

受験生にとって、この夏は「登り」坂です。苦しい日が続くとは思いますが、長い道のりを登らなければ見えない「景色」というものがあります。今まで見ることが出来なかった「絶景」が待っていることを信じて、苦しいけれど一步一步前に進んで行きましょう。